

## 胡楊を求め、額濟納旗を右往左往

吉川 賢（岡山大学）

2003年9月末の晴れた日の夕方やっとな額濟納旗に辿り着いた。長い長い砂漠の道路が終わって、道沿いに人々が屯しているカラフルな町に入ると風景は一変し、ここまでの1日、ずっと見続けてきたあの荒涼とした砂の原が夢だったのではないかと思えてしまった。西夏の時代にまで遡れる歴史を持つオアシスで、胡楊が、そして紅柳が今どんな問題に直面しているのだろう。次の日から町の周辺を見て回った。

まず町から東へ、昨日来た道に戻っていくと、道路の両側にはいろいろの大きさの胡楊林が続いている。小型の個体の中には樹冠の一部で葉がすでに黄色くなり始めているものもあったが、おおかたの胡楊はまだ秋の柔らかな日差しを受けて緑の葉が風になぶられ、葉擦れの音を立てていた。ピンクの花を咲かせた紅柳 (*Tamarix ramosissima*) がしっかりと地面を覆っているところもあれば、砂質の地面が露出しているところもある。不思議なことに、胡楊の枝の下には紅柳がない。胡楊が紅柳を寄せ付けないのか、紅柳が胡楊を避けているのか分からないが、どちらも相手を意識して生きているようで、ほほえましい。

3つほどの胡楊林を調査の候補地とした後、次に町の北側を見ることにした。黒河から引かれた水路に沿って広がる農地の中に、額濟納旗で最も大きな「神樹」と名付けられた胡楊が青い布を沢山巻かれて立っている。樹齢800有余年、樹高27mのその巨木は孤立し、額濟納旗の天を支え、地を覆っている。波打つような肌の樹幹や横倒しになってなお葉を茂らせている枝は、その圧倒的な迫力にもかかわらず、かえってそれらを載せている「大地」を実感させてくれるものであった。何本かの同じ様に大きな胡楊がお互い数10m離れて立っているのだから、この辺りは胡楊が大きく育つための環境がそろっているのだろう。しかし、周りは紅柳ばかりが目立って、その中に1m前後の胡楊の稚樹が見え隠れするばかりだ。巨木は生き残ってさらに大きくなっていくが、次世代はもう永く現れていない。これほどの巨木を支えるにはかなり広い土地が必要で、後

継樹の出現は神樹には望ましくないことなのだろう。神は群れず、か。

さらに北に進むと、農地もなくなって、胡楊も見られなくなる。それまで砂地だったところが、小石が敷き詰められた荒漠地になり、ここにはもう一つ別の種類の紅柳 (*Tamarix elongata*) が点々とマウンドを作っている。胡楊の下に出てくる紅柳はマウンドを作らないが、風が吹き、砂が流れるところでは大きな砂山を作る種類が優占している。高さは大きいもので2mを超えている。ひとつひとつが離れている場合もあれば、いくつものマウンドがつながっているところもある。僅かに場所を移動するだけで群落の様相がどんどん変わっていく。車を止めてカメラのファインダーをのぞくと、マウンドの背景には地平線があり、その向こうには居延海、そしてゴビアルタイ山脈に続く荒野が広がり、成吉思汗の軍馬のいななきが風の中に聞こえる。車を発進させた瞬間タイヤが砂にめり込んで動かなくなった。みんなで車を押して穴から引き出して、やっと出発したと思ったら、すぐ後ろで次の車が同じ穴にはまりこんで動かなくなった。もう一汗かくことになった。



写真1 紅柳のマウンド

次は南に向かった。砂丘の中、ワジの中を胡楊林を捜して右に左に走っていると、小さな川の跡にぶつかった。水はなく、河床の泥水が最後に干上がる時にできる一辺1mはあろうかというかさぶたのような泥の固まりが続いている。慎重に危険を避けようとして、かえって悪い結果を招いた。車は小高い砂丘の上からその泥の中にジャンプ一番、左の前輪も後輪もどろどろの粘土の中に飛び込んで、大きく傾いて止まってしまった。運転手はたまたま通りかかった牧民にスコッ

ブを持ってきてくれるように頼んだが、こうしたときには必ず牧民が「たまたま」通りかかるのは不思議なことだ。彼が戻ってきて、無事タイヤが掘り出されるまで、だいぶ時間がかかりそうなので、周りを歩き回ることにした。数mの高低差の砂丘が続く中にずんぐりとした胡楊がその電信柱のような樹幹を砂に差し込んで疎林を形成している。神樹の辺りと違って、たいていの木の高さは10mそこそこしかないが、その中にいくつか枝先が枯れているものがあった。お互いに地下では水をめぐってある時は激しく競争し、ある時は助け合っているのだろう。あちらこちらに見られる先枯れはそうした水不足の結果であり、いつ頃からそんなことが起こり始めたのだろう。牧民は、20年も前から胡楊は西の方から枯れ始め、この辺りで先枯れが目立つようになってきたのは2、3年前からだと言う。当然、黒河の水量変化と深く係わるので、その関係についてはすぐに答えが見つかるだろうとこの時は思っていた。しかし、結局プロジェクトが終わっても喉に刺さった小骨は抜かず、夜な夜なお菊に祟られる青山播磨の毎日が続いている。最近の年輪幅から先枯れが起こり始めた時期が分からないかと思い、パイプに螺旋状の刃がついた成長錘で木部のサンプルを取り出すことにした。螺旋の刃を幹にねじ込んでいくとジュルジュルという聞き慣れない音がしてきた。パイプの中の木片を抜き取るとその後からなんと樹液がポトポトとあふれ出してきた。驚いた。見ていたみんなも驚いた。普通は木の幹に穴を開けても水が噴き出すようなことはないのだから、不思議この上ない。どんな味がするのかと出てきた水を舐めてみたが、差し込んだパイプの鉄の味しかなかった。水はいつまでも出続けることはなく、しばらくすると止まってしまう。次の日にもう一度川に近いところに立っている胡楊で穴を開けてみたときには、水道の蛇口をひねったように勢いよく水が噴き出した。1分ぐらいすると出終わったが、噴き出した水は幹の根元から40cmも飛んだので、幹の周りは立ち小便をした痕のようだった。この現象を胡楊のオシッコとは言わず、中国では「胡楊の泪」と呼んでいる。どの胡楊でも水が噴き出すとは限らないし、噴き出す勢いも個体によってまちまちだった。たくさん穴を開けているうちに気がついたのは、どう

も川筋に近い所や、林分の端に立っている胡楊ほど水を噴き出す確率が高い。枝が大きく枯れていたりしても水は出ないので、いくつかの条件がそろって幹の中に水を溜めことが出来るのだろう。しかし、どうしたら葉で失った水を根から吸い上げる過程で、幹に貯められるようになるのか、不思議だ。不思議だなあと思っているうちに車も無事泥の中から助け出され、町に戻る時間になっていた。所々舗装が剥がれている道路に出て、後ろから西陽を浴びながら、帰途についた。途中、道路が低くなって沈下橋のようになっているところで、膝上まで来そうなほどに水が貯まっていた。越えていくために水に入ったところでエンストした。砂にめり込んで始まった一日は、水の中のエンストでけりをつけることになった。

砂漠は水が無く、オアシスは河の水の増減で砂漠になったり湿地になったりしている。そんなところに住んでいる植物は湿潤なところにいる植物では考えつかない不思議な方法で水を確保し、水と馴染んでいる。



写真2 泥にはまった車